

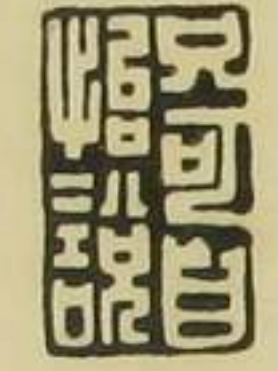


御青山  
 流山  
 活卷多引種  
 後篇  
 四

3多9  
 1412  
 4世



門ヲ多  
番巻  
1412  
4止





卷之四初

春

九江寫

亦

卷之四  
二

嘉永六年秋

日松園學人書

亦  
後

亦  
後

嘉永四年文初春挿於  
華頂山小書院



紫竹  
山茶

花器 華頂山什寶  
光格天皇御遺物白銀牡丹花黃金

攝津國浪速

蕉雨亭秀月

通稱 大信寺典澄

大僧正顯道

君の世をみる所の花は

春をりりそ

あつさうかえゆく

そよひあけをり

萬年青 二花  
十七号

船形鉢組留

丹後國岩瀧  
思燕齋 晒暎  
通稱 小室佐喜藏



五ノ葉ノ花ノ色ノ  
赤ノ如クシテ  
白ノ如クシテ  
赤ノ如クシテ  
白ノ如クシテ  
赤ノ如クシテ  
白ノ如クシテ

玉峰 謹

一葉 五十一葉

嘉永元年戊申九月朔  
洛東祇園社序幸之洞

力ノ字ノ根ヲキテ  
孔ノ字ノ葉ヲ  
糸ノ字ノ花ヲ

器 江戸 翠松亭所鑄



互春齋 岩田英雅



山城國准御會頭  
美松亭勁節  
通稱 佐竹善兵衛源義忠



食之  
旨之

中山大納言忠能卿

騷人足奇思  
香草此君子  
况復霜下傑  
清芬絕門苞  
氣稟金行秀  
德備黃中  
美古來鶴髮  
翁養英飲  
其水古老  
泉作應搜  
書之

忠能



山城國准御會頭  
美松亭勁節  
通稱佐竹善共衛源義忠

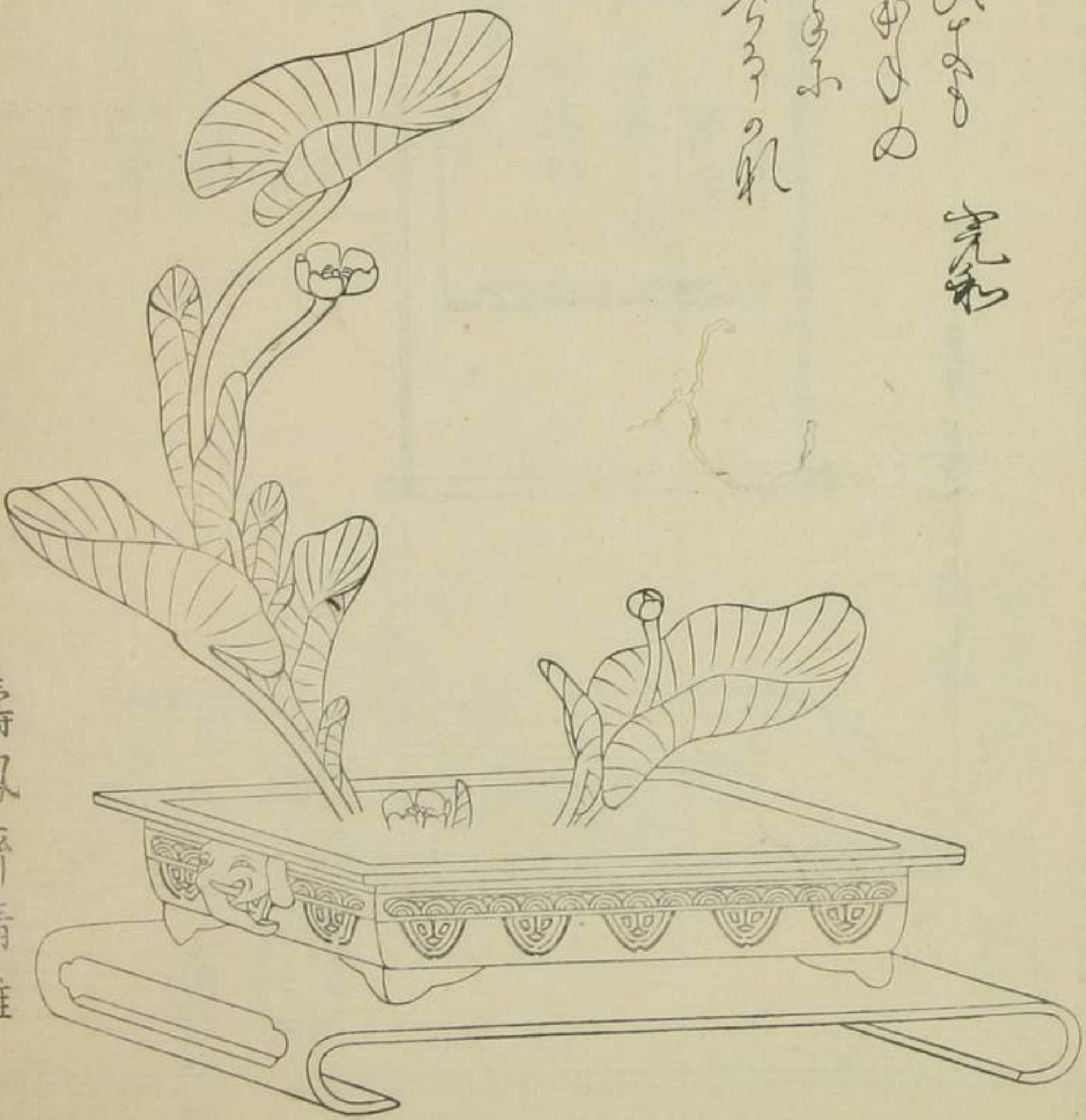
嘉永五年壬子初冬挿於  
園御殿與御座之間

菊七種  
竹器銘 四方乃山屋





萍蓬草 十一葉  
三花



壽鳳齋清雅

通稱 服部辨次郎

ゆきよりさるしよも  
あまのいほゆひの  
とらふとれよふ  
あまをさるしよも  
完和

山菜黄  
山茶 赤毛

器亀堂鑄



あまのいほゆひの  
とらふとれよふ

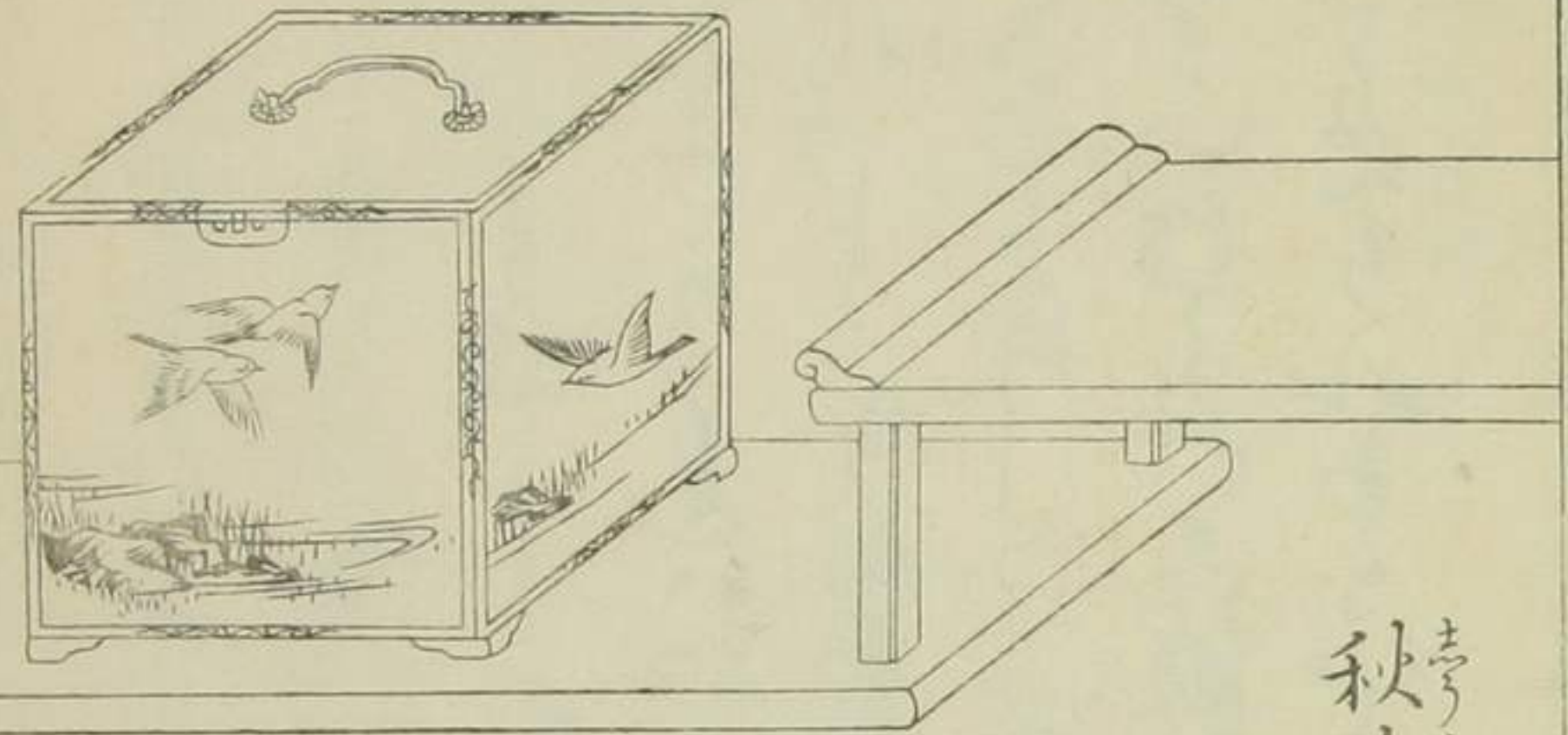
あまのいほゆひの  
とらふとれよふ  
西裕

紫溟軒紅霞

通稱 別所直次郎藤原高裕

○活花手引種後編卷之四

砂算筒



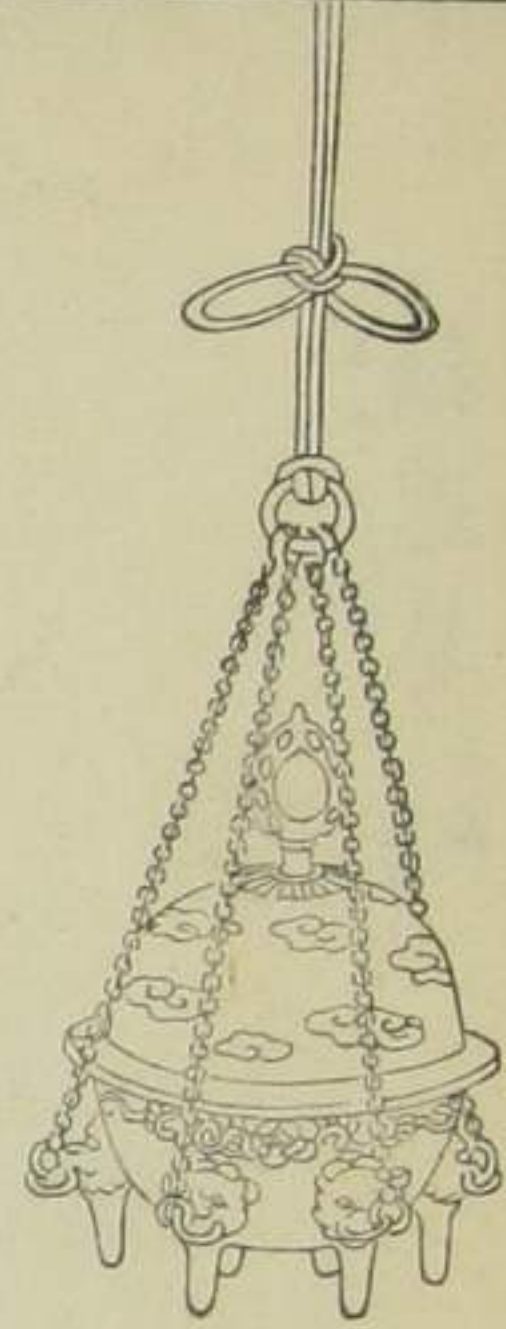
秋海棠



淡月軒梅雪  
通稱 西田源助

東舉寫圖

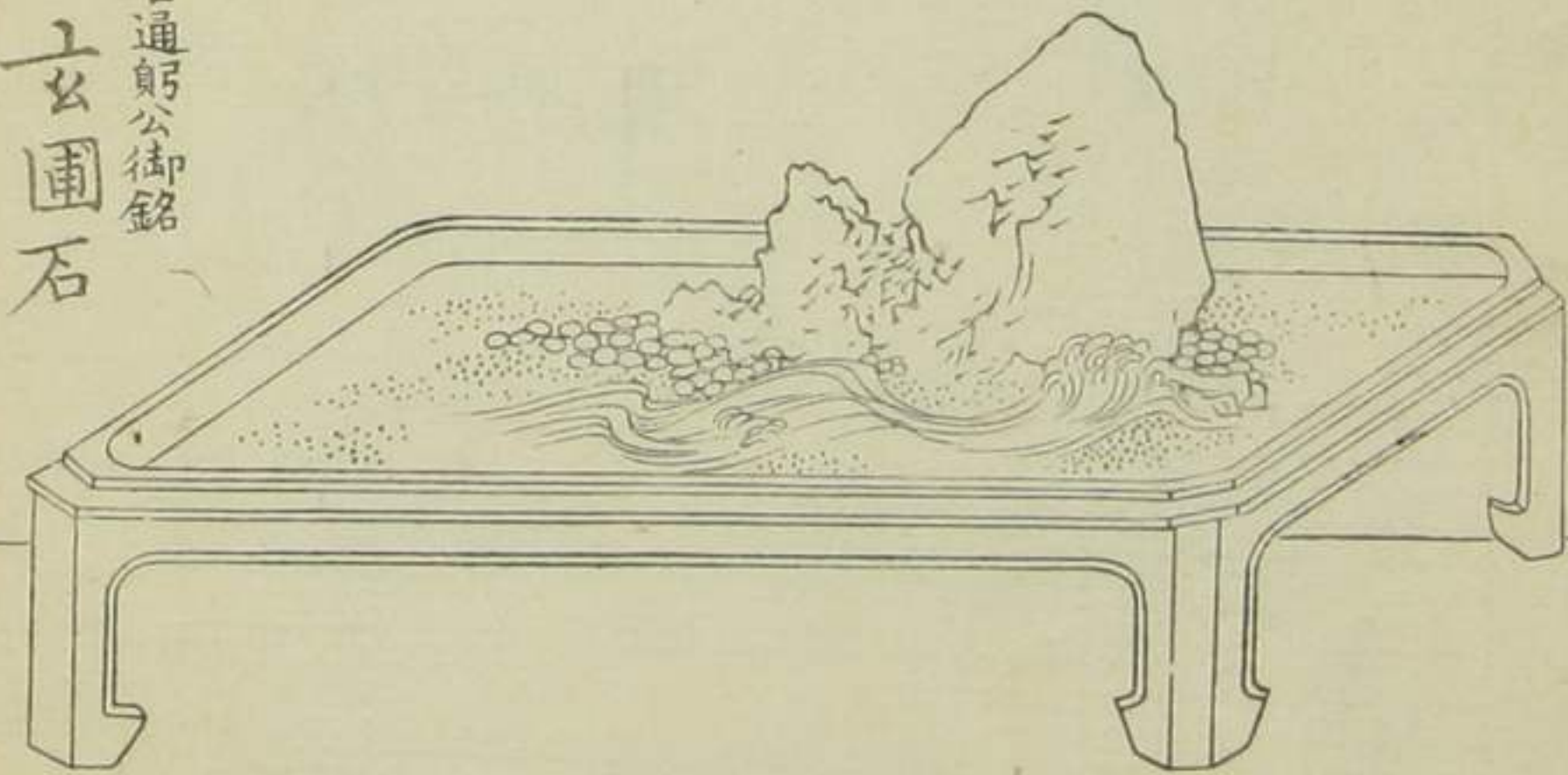
千種侍従有文朝臣



雲の若里より  
さしぬく海原の  
あまの松合ふあまの  
志の波 有文

主石 中院大目通躬公御銘

玄圃石



貴人盆

打雜浪

錦章亭逸雅

〇七



山櫻  
松

器龍文堂鉢

万年守 鑑

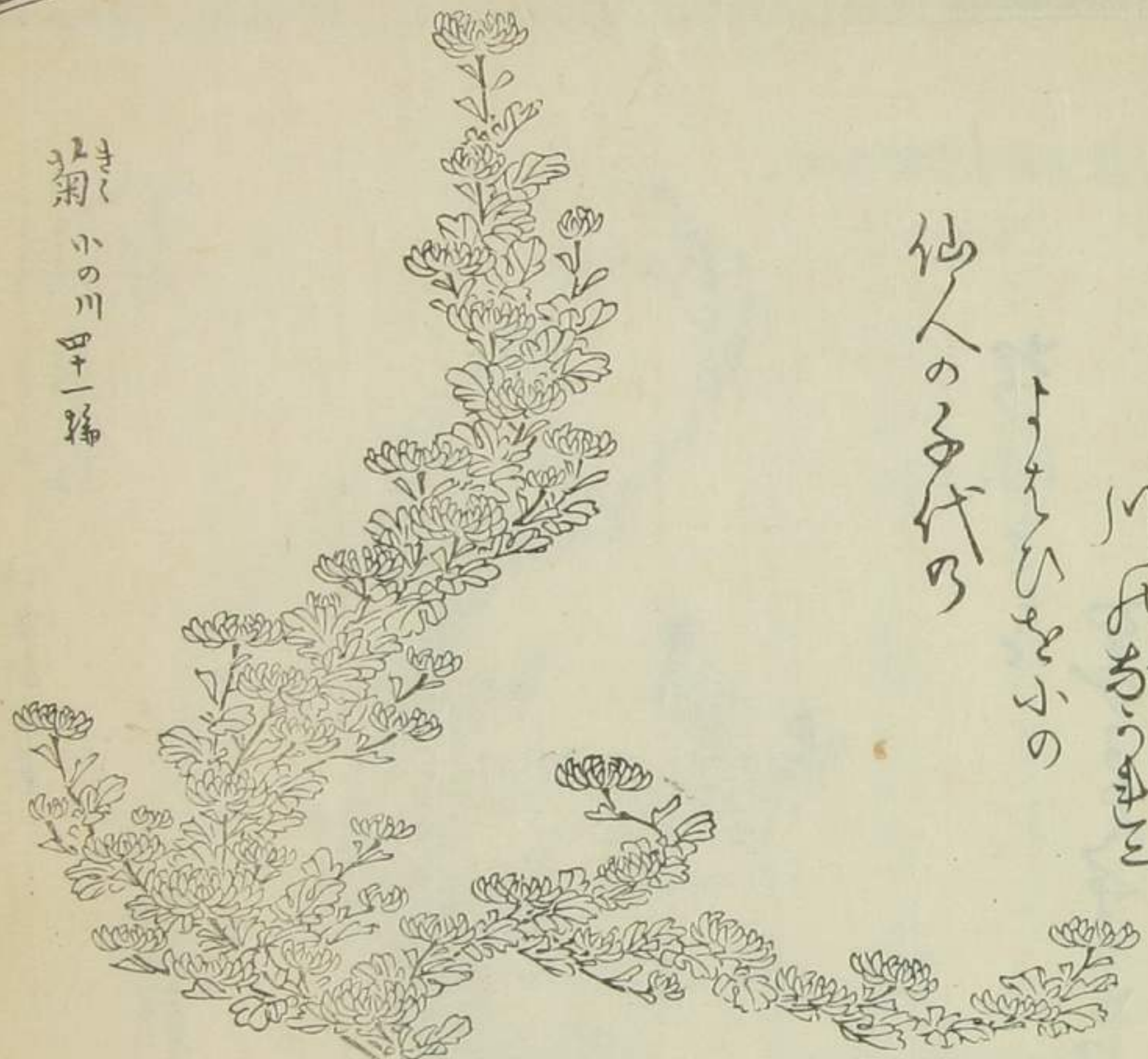
泰松軒和曉

通稱 栗原主馬 源泰高

常盤木何ぞはと松をうりて徳をよりけり  
 花の木敷おほのれと様の方けりてあり  
 松をとおもひて中よりさきとてし標を  
 考へきもあつとひるれ標をまきとてし  
 しとての冠帯のしとてしとてしとてし  
 おれりてしとてしとてしとてしとてし  
 ちとてしとてしとてしとてしとてし  
 えとてしとてしとてしとてしとてし  
 とあつりてしとてしとてしとてしとてし  
 ちとてしとてしとてしとてしとてし

長澤伴隆

北き川の甲一端



仙人の子代

仙せん人にんのの子こ代しろ

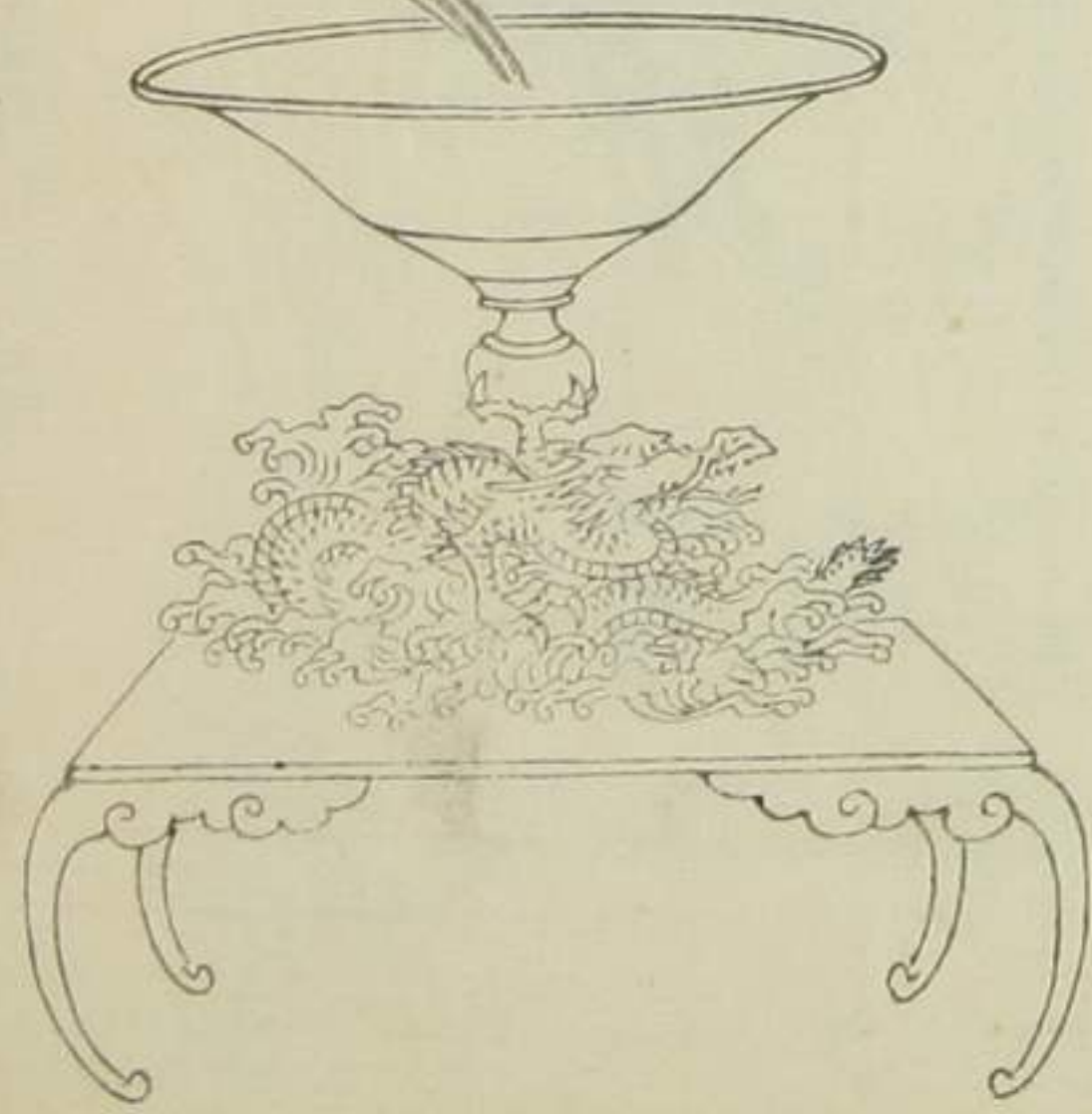
むかし

あきの  
下

敬忠

壽鶴軒松翠

通稱 石田亦七



燕子花つばき 三年

大おほいいなななななな

ささささささささ

つつつつつつつつ

なななななななな

敬忠



隣松軒友石

通稱 榎山勝右衛門

水僊 すいせん  
花器 はなうつ  
五草 ごそう  
二年 にねん  
江都 えと  
渡雲齋作 わたぐもさいさく



大和國奈良 大和國奈良  
壽仙齋方雅 壽仙齋方雅  
通稱 通稱  
齊藤利兵衛定方 齊藤利兵衛定方

三條西參議左中將李知卿

此乃花富麗  
大子好花也  
李知卿

青柳 あおやなぎ  
薔薇 ききょう  
菜花 ななはな

竹器銘洞鼎

梅 うめ  
松 しょう  
竹 たけ  
石 いし



梅章齋和石 梅章齋和石  
通稱 通稱  
高木徳左門美成 高木徳左門美成

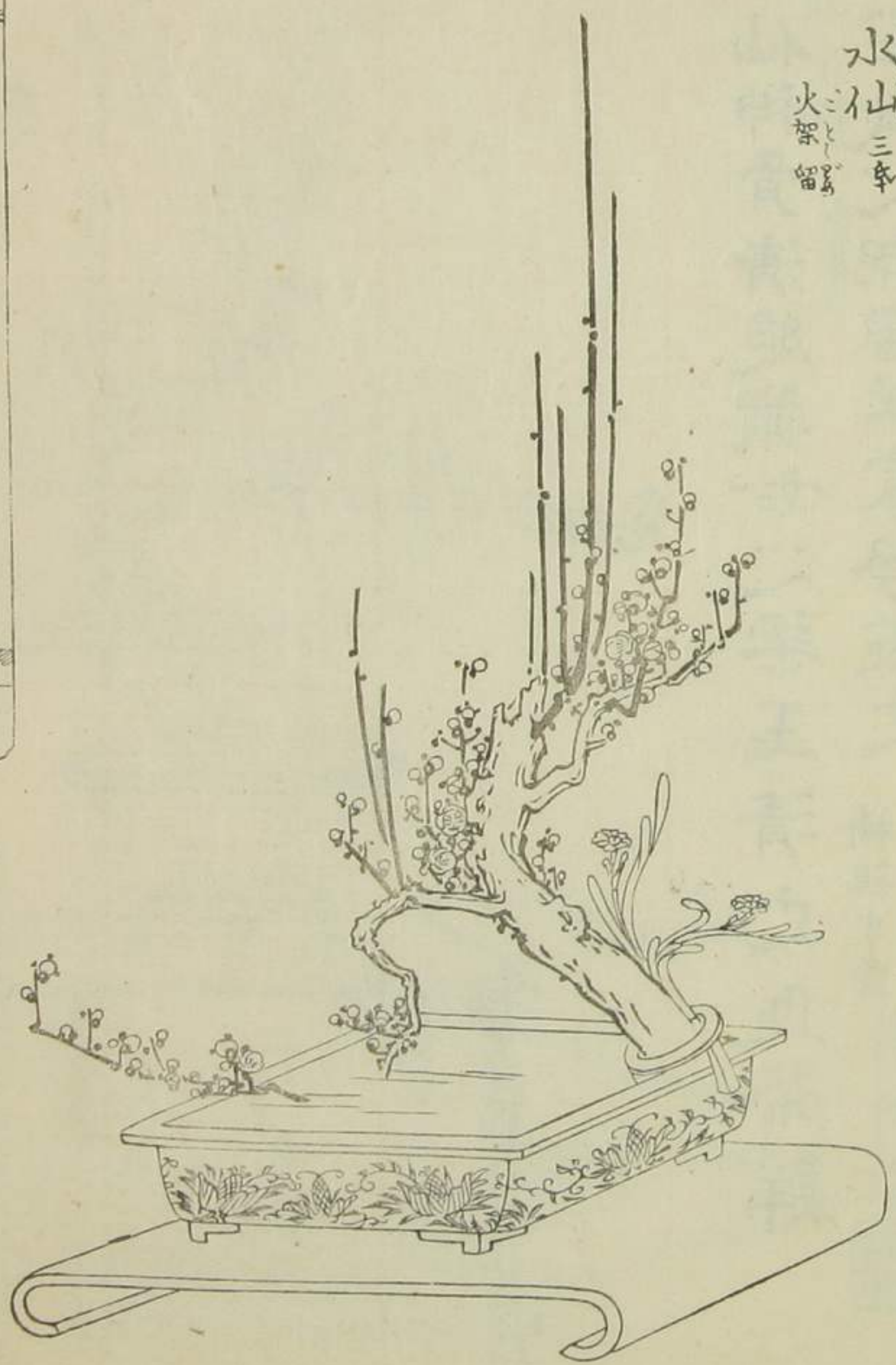
黃冠素服兩嬋妍  
揮向瓶中一好清  
月摩外高標誰得  
任回舟李郭是稜  
僊

梅名水仙月瓶圖

宮東龍



梅  
水仙  
三  
火  
留



拂雲齋吟雅

通稱 益井喜三郎

○活花寺引種後編卷之四

此花  
毒以  
似如  
や  
東  
る  
色  
梅  
花

冠棚  
山茶  
水仙

紅蓮寺四條  
本阿弥白三條  
二幸砂留

江都  
渡雲齋作



流霞亭梅雅

通稱 片山權兵衛

〇十二

水仙神骨清絕  
織如之梁玉清  
之血茶鮮  
妍石氏之翔  
眉羊家淨琬  
史

摘瓶史語

明軒書



観音蓮  
一系重



若洲藩中

掬翠齋冲石

通稱 森川市良左門源俊高

乃之京一子け架

祐胤

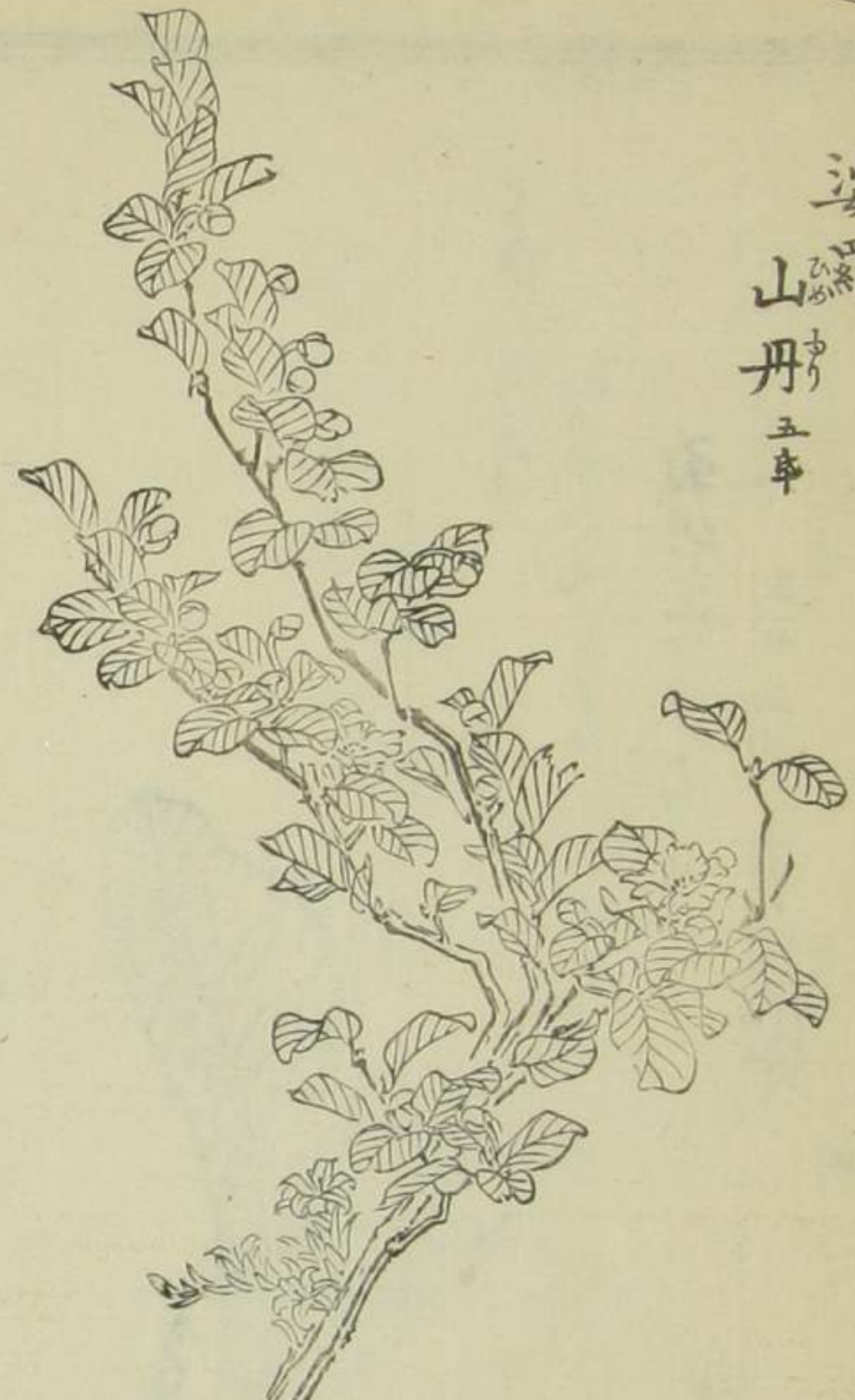
夏のさきばら

あまのり

さきばら

〇活花手引種 後編 卷之四

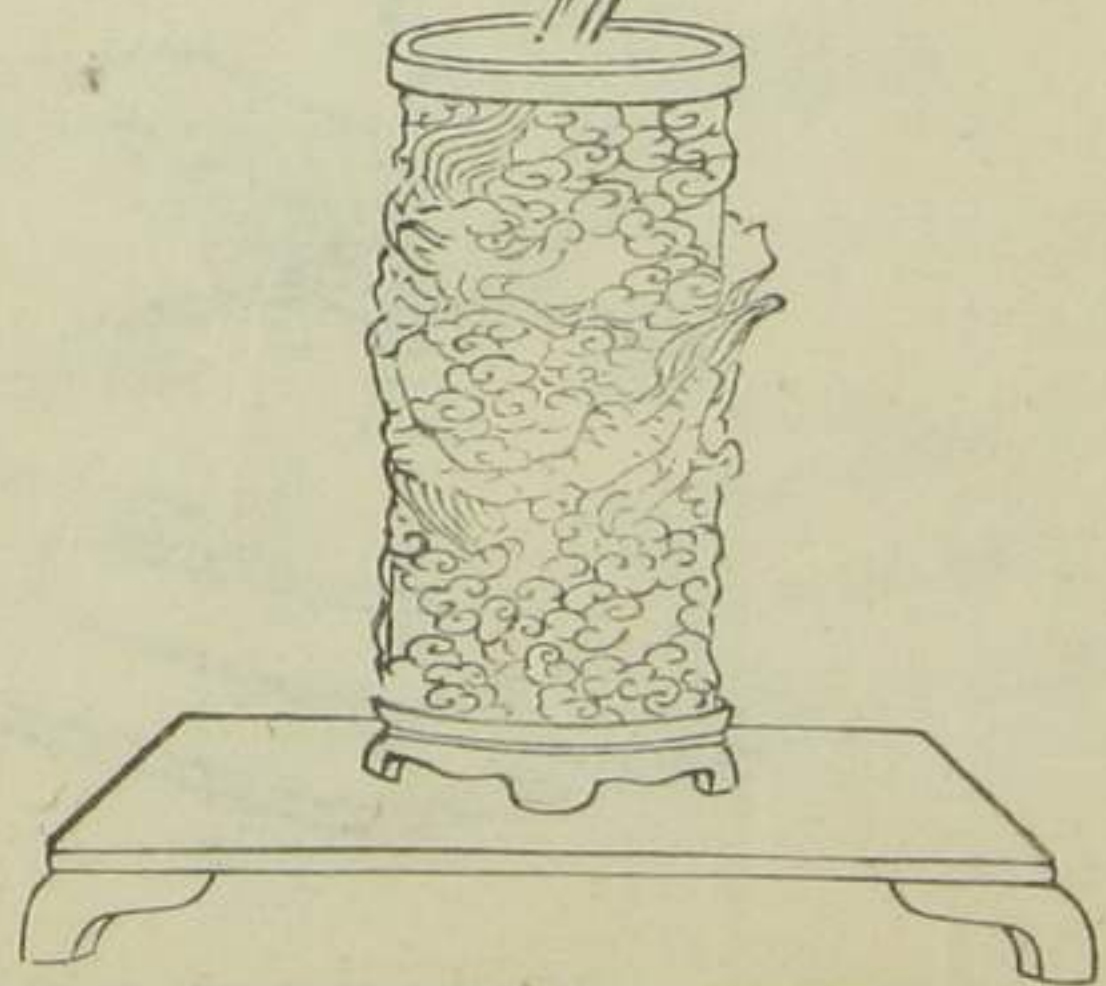
婆羅山丹  
五車



霞谷齋文雅

通稱 田原文次郎

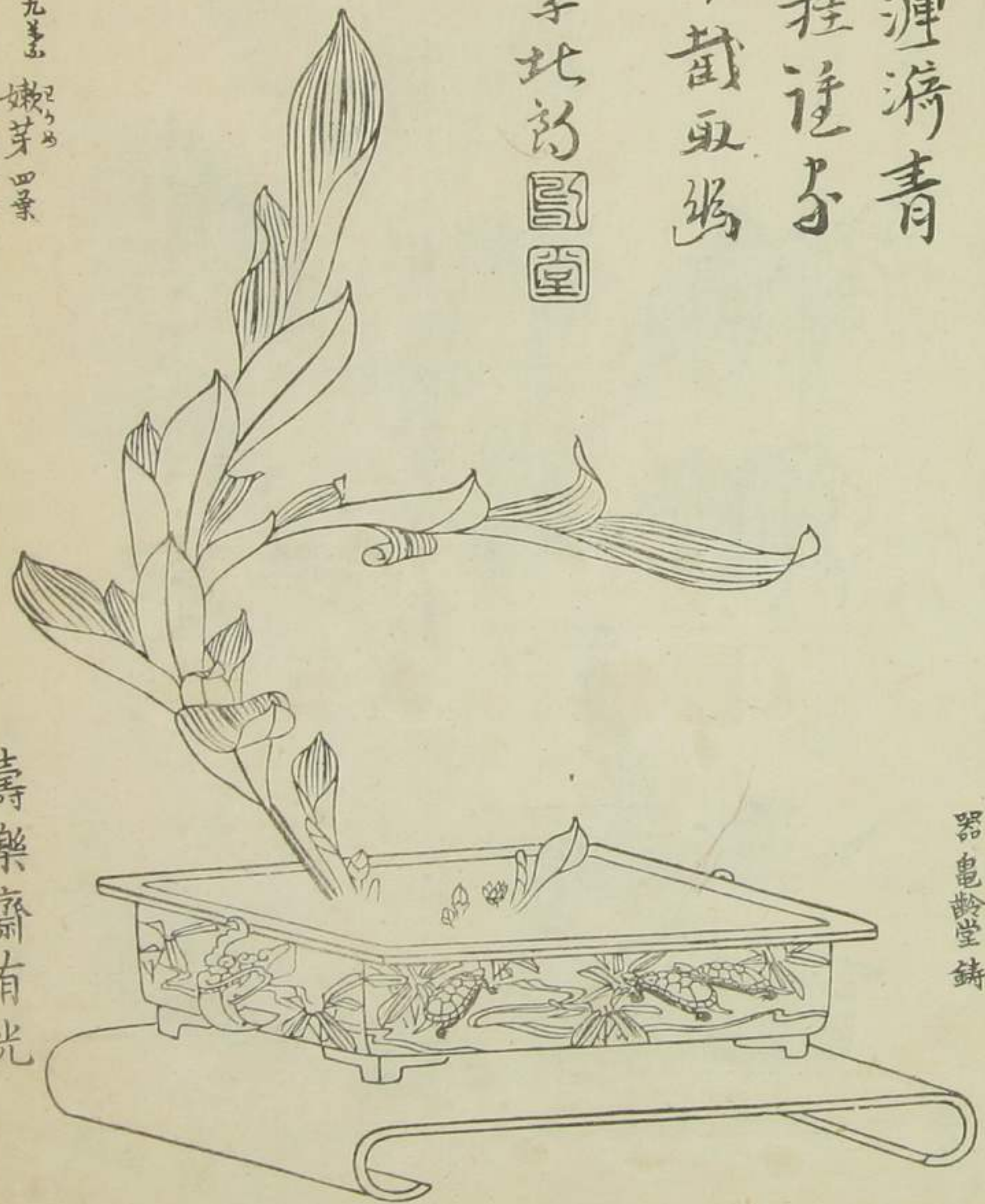
此花之葉如松葉而花如櫻桃花也  
其葉可食其花可飲其根可藥也  
其性溫和不寒不燥不酸不苦不辛不淡  
其味甘香其氣芬芳其味清醇其色潔白  
其質堅韌其力宏大其功神速其效顯著  
其用廣博其利無窮其德無量其壽無疆  
其美無匹其貴無倫其尊無上其榮無雙  
其盛無極其衰無窮其變無常其化無形  
其妙無言其理無盡其法無窮其術無窮  
其道無窮其德無量其壽無疆其美無匹  
其貴無倫其尊無上其榮無雙其盛無極  
其衰無窮其變無常其化無形其妙無言  
其理無盡其法無窮其術無窮其道無窮



漾三起漣漪青  
帆一葉挂徒尔  
快剪刀截取出  
清界

李北詩

一 心らん 十九葉  
二 嫩芽 四葉  
三 花 二葉

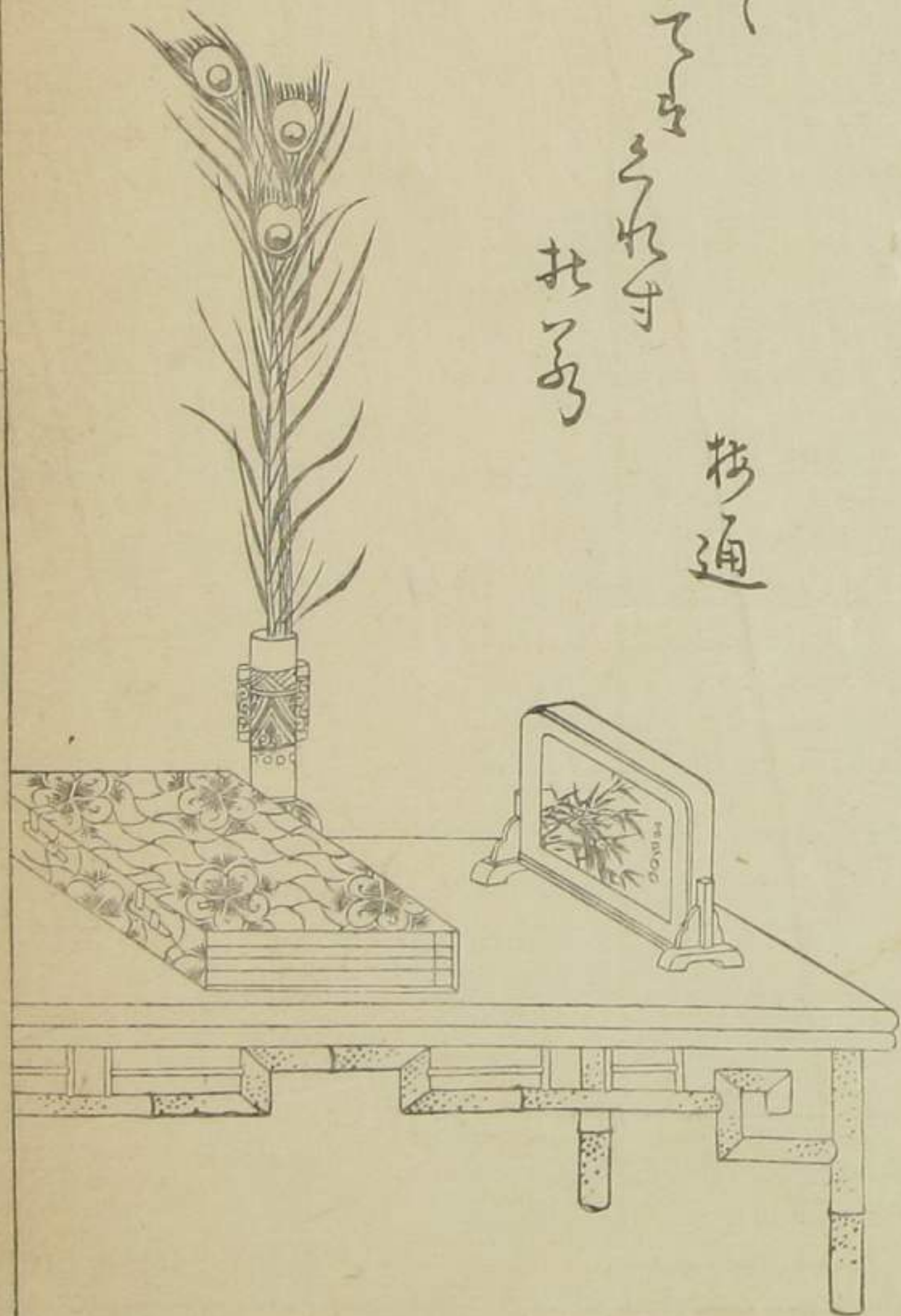


器 龜齡堂 鑄

壽樂齋有光

通稱 菊岡新次郎



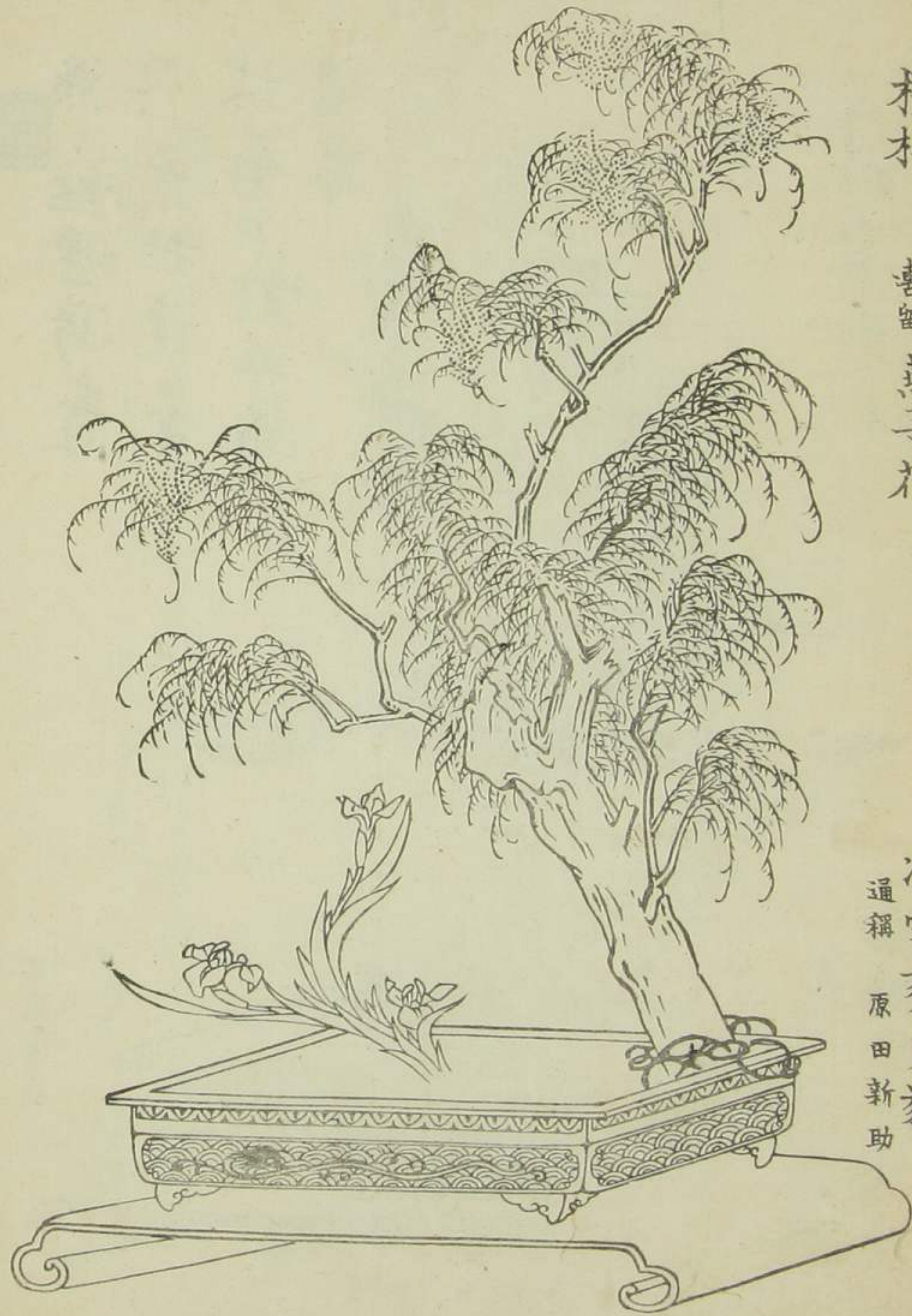


一  
ふりて  
まつて  
まけす  
北子  
抄通



移来柳影斜 日在西欄忽見  
羅帷上淡了 水垂鸞星船 齋 苑

檉柳 磯 喜留 燕子花 三車



凌雲齋貞鞋  
通稱 原田新助

あゝ玉乃もは  
出る存我へんり  
こゝろのこゝろのこゝろのこゝろ

壽

挿福壽艸

壽谷齋隆雅

通稱 海老名謹吾 源秀一



さし置たるはるに花 道元  
ては乃ぬのまよふ  
うはれはるら枝

挿梅花

松雲軒菊溪

通稱 廣田嘉兵衛

首香何粉迭隨時諫  
蕊高低在擇枝少置  
性淡如畫苑剔除要  
勿換天姿裁烟前雨露  
方成趣助孤呈紅名稱

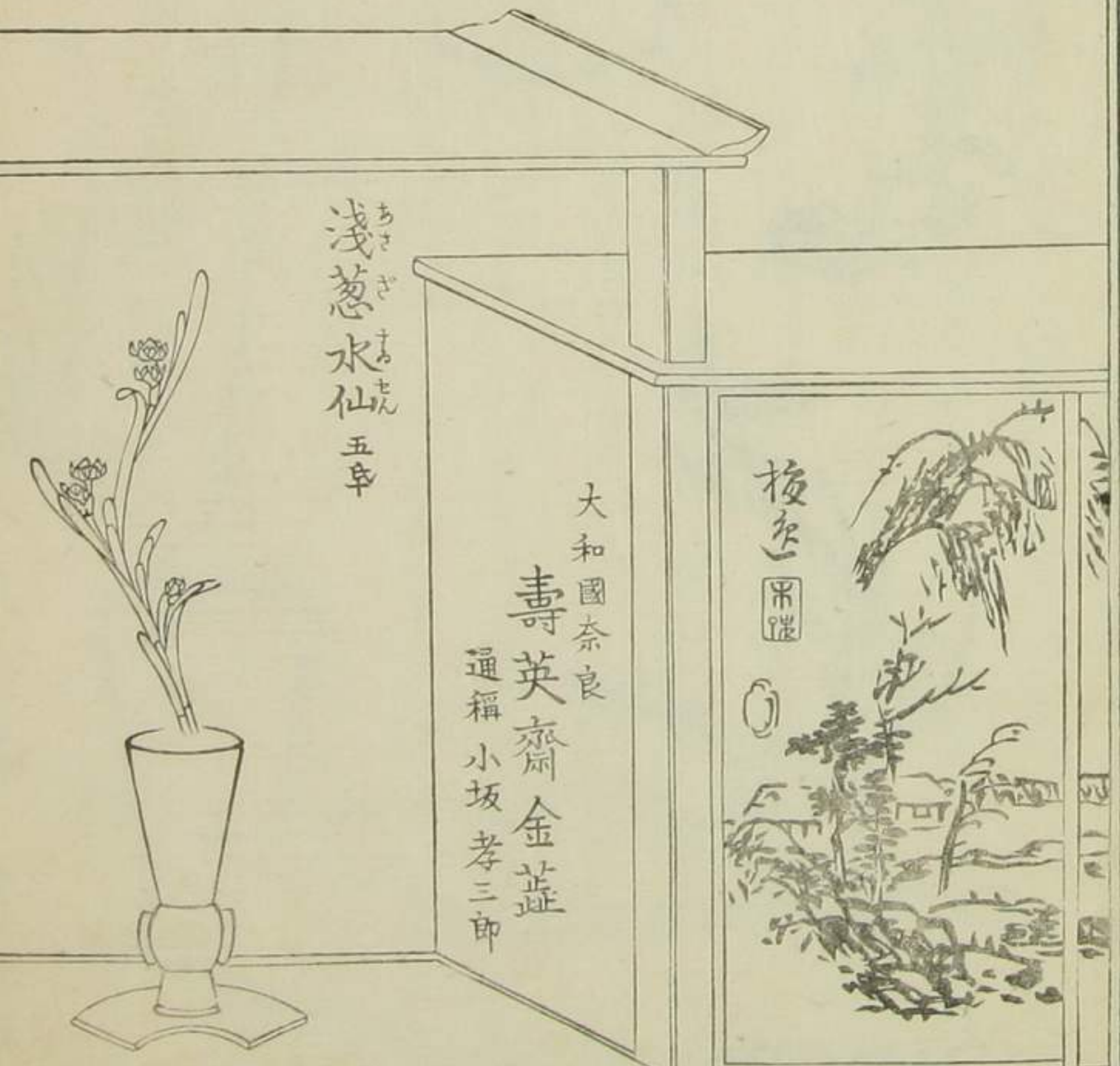
宜於淺餅君穿揮訣  
一篇披閱有餘沙  
嘉嘉壬子之米明月

陶所生題



漸歩馬  
 波色澄  
 仙風道  
 骨冷於  
 水者時  
 作賦人  
 何玄素  
 月碧雲  
 情石孫  
 水儂也  
 柳所生園

○活花手引種後編卷之四



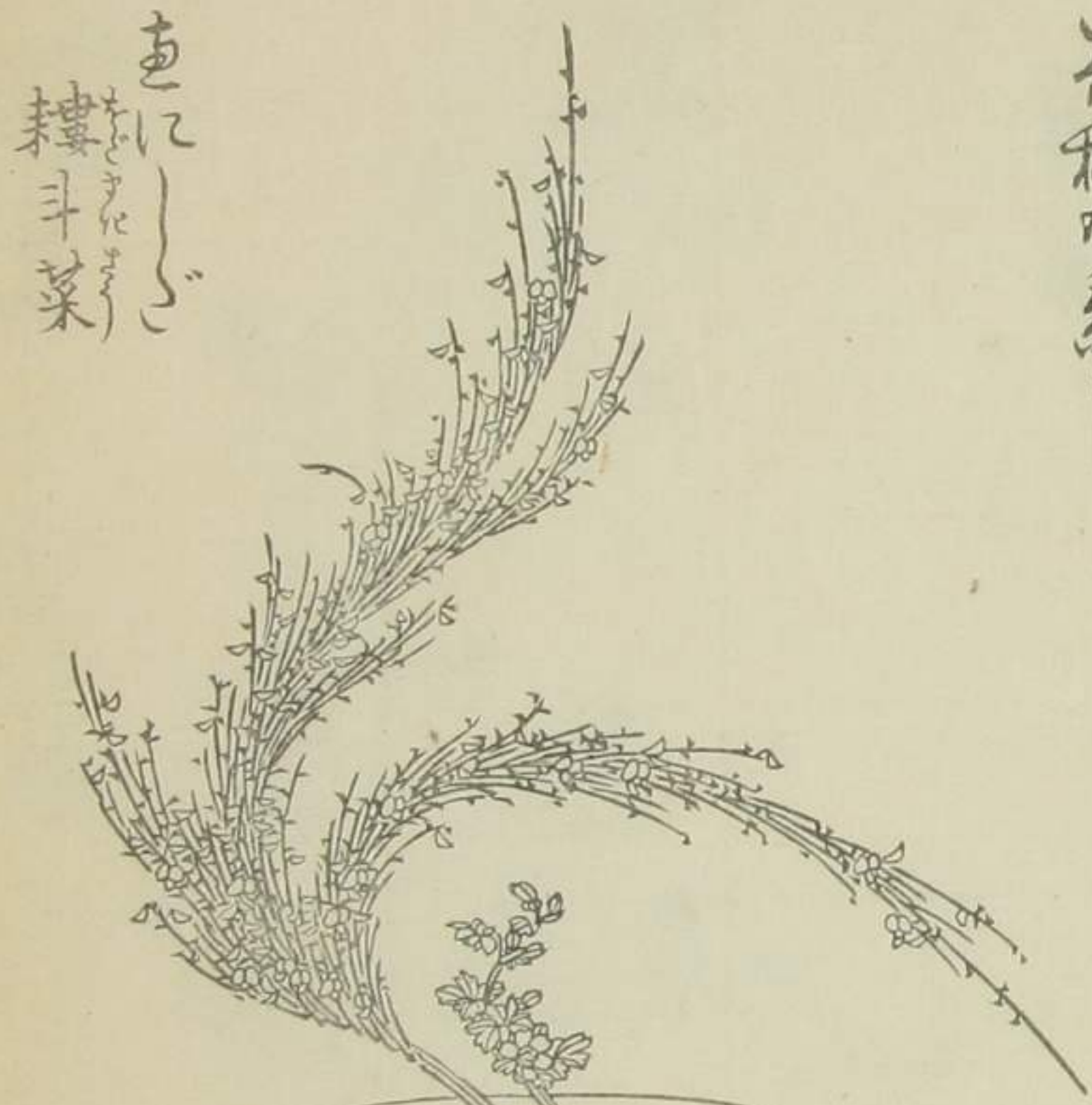
水揚  
 番牡丹

水揚  
 番牡丹  
 景恒



伊豫國松山  
 南松齋鯉居  
 通稱關松之助





一毛齋瀨石  
通稱 中野忠八郎

直に  
糺斗菜

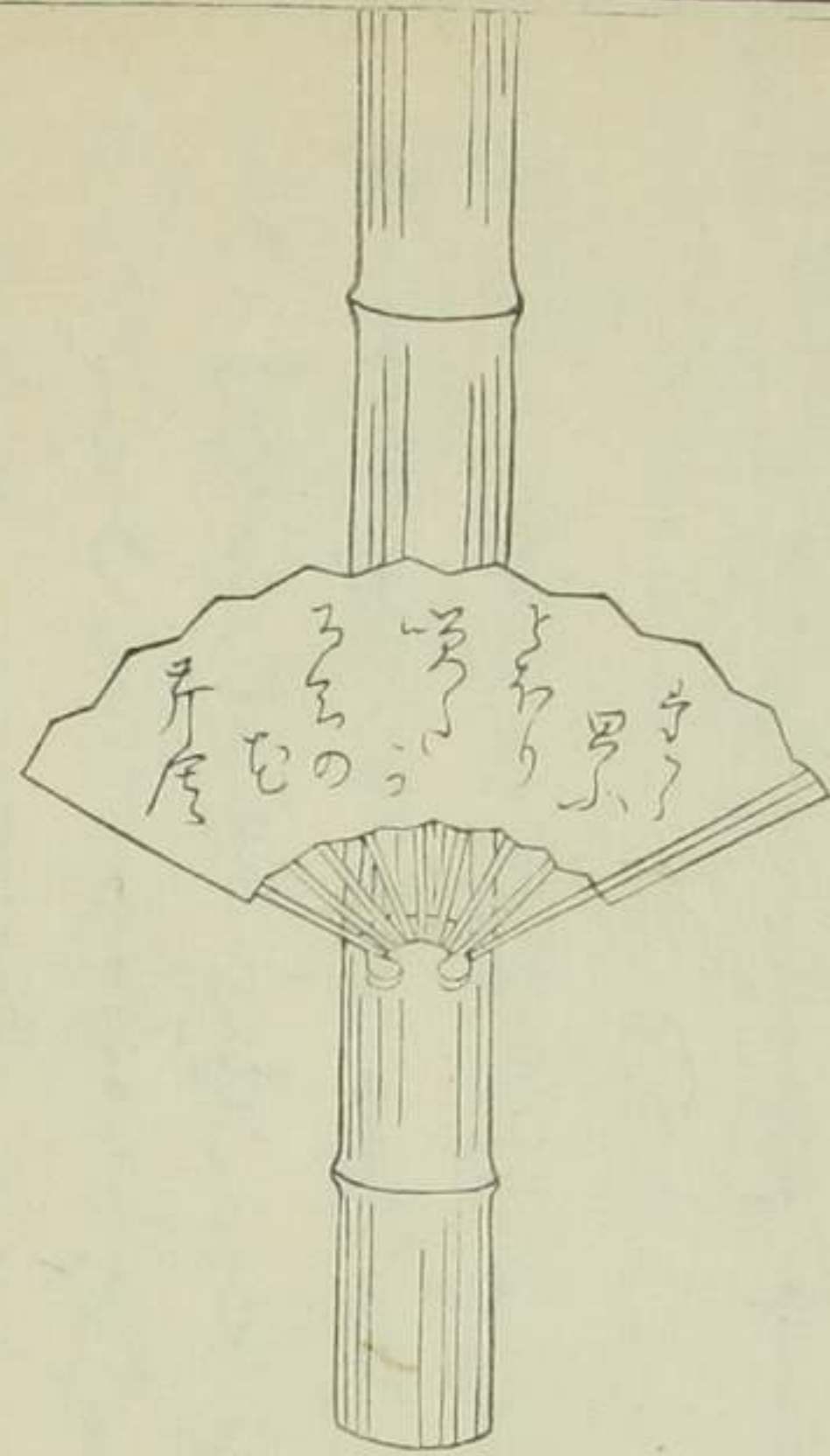
芳柳の糸と

花の  
糸と

花の  
糸と

温蔭

百合七花



水月軒柳枝

通稱 橋本利兵衛

蘆草  
萍蓬艸



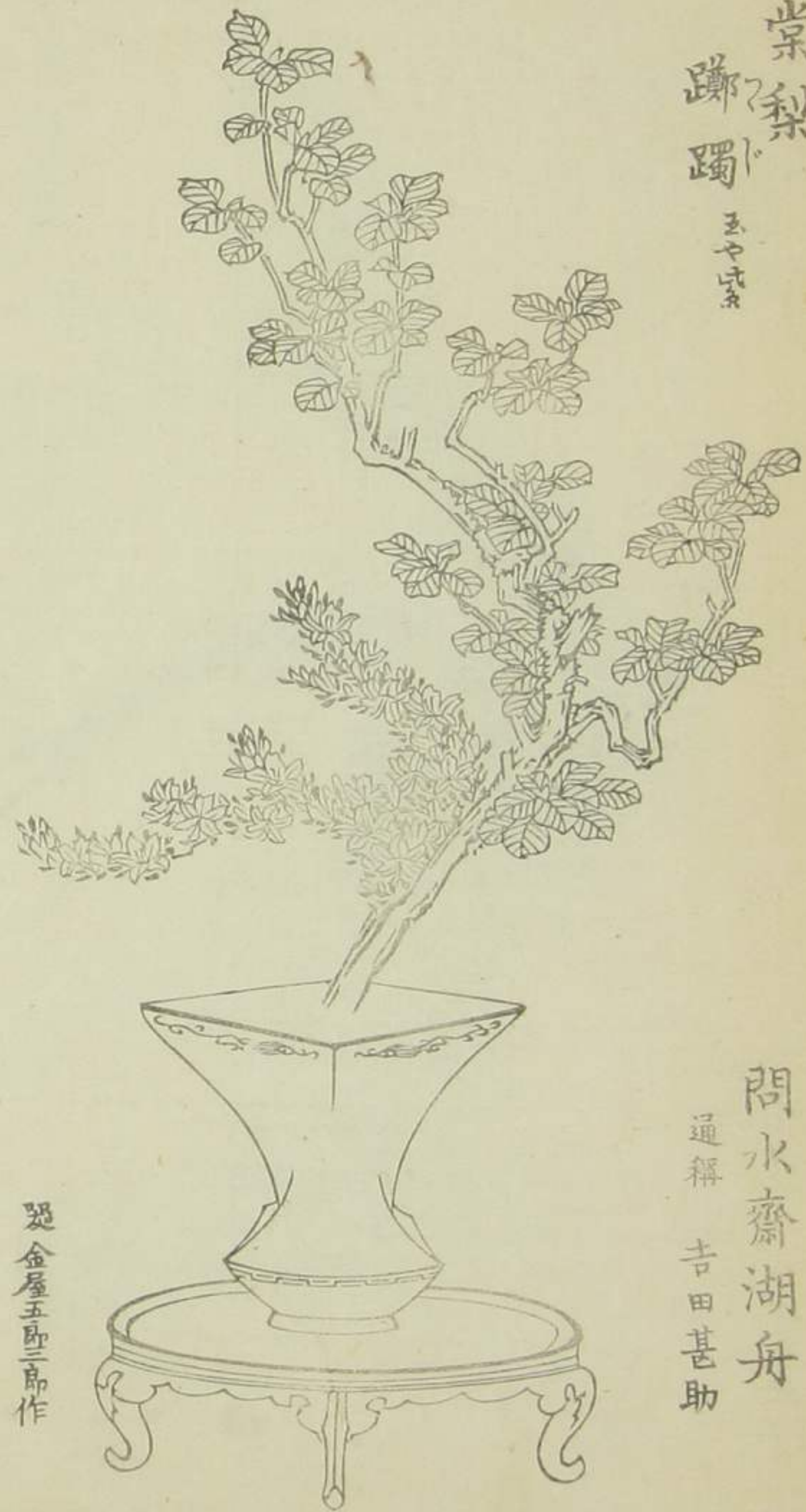
萬碧齋一水

通稱 小谷早太源一清

あまよも  
あまのの  
あまのの  
あまのの  
川岸此花

縁集

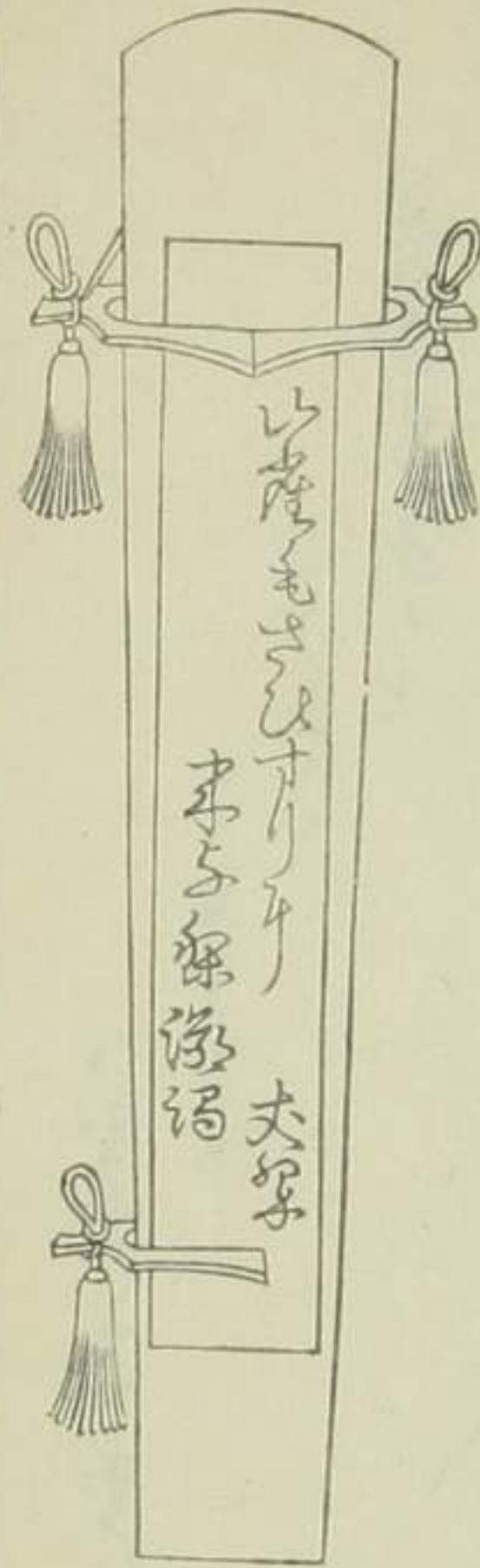
棠梨  
躑躅



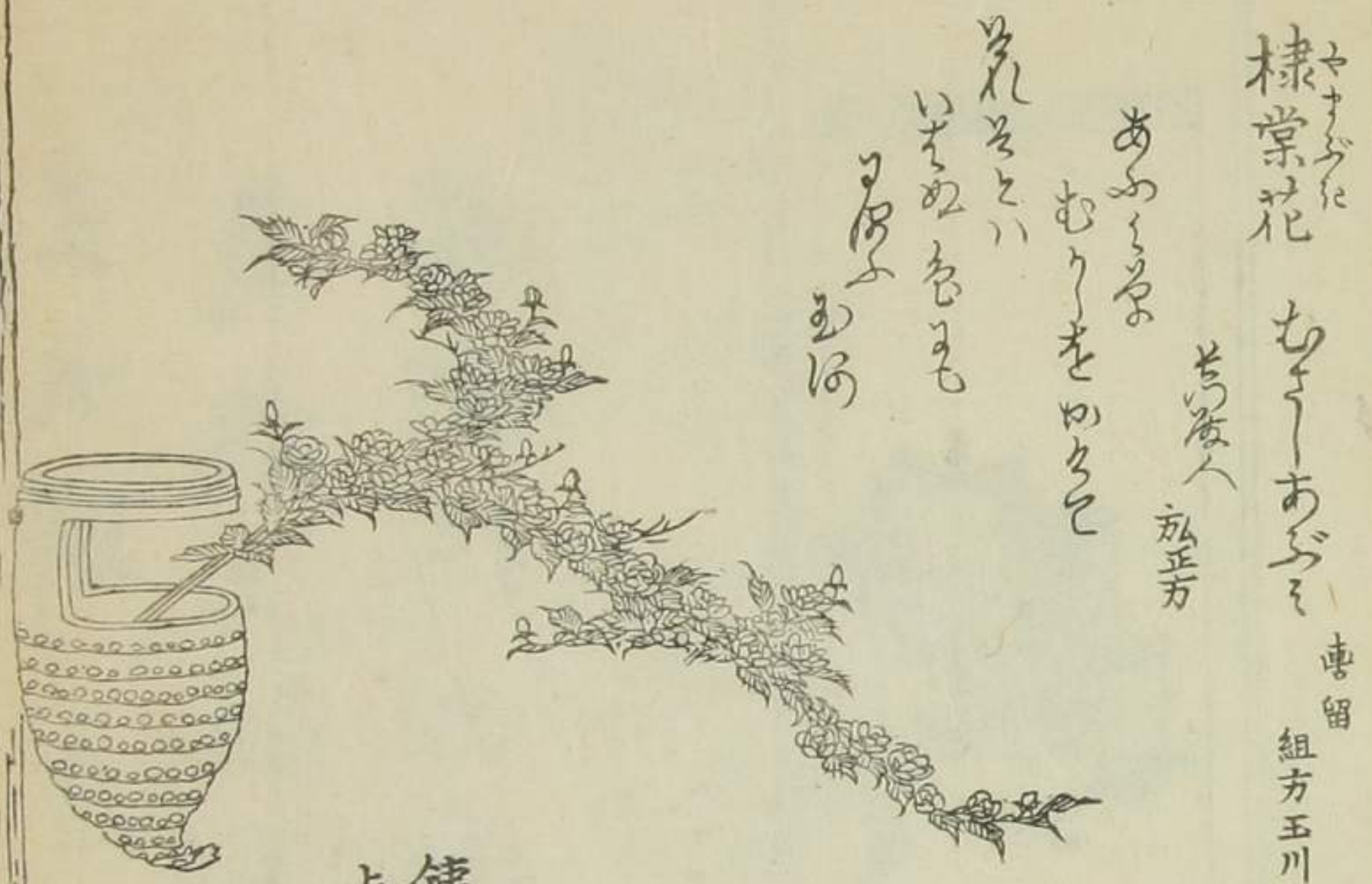
問水齋湖舟

通稱 吉田甚助

醍金屋五郎三郎作



しほ毛のひかり  
才と深淵  
大守



様棠花 やまがはな  
 ああ〜あ  
 むう〜をゆたて  
 くれそと  
 いそぬをよも  
 玉河

東留 組方玉川

鏡鑲挿鏡草  
 上常棣棠英  
 玉水憶遺詠  
 寫来傳馬情  
 長門山根温知



來青齋藍水  
 通稱 服部隼人

百年寫

一葉十三葉

さ〜ゆ〜海廣葉  
 さ〜ゆ〜み〜ま〜  
 湯の〜ま〜ゆ〜  
 おの〜わ〜ゆ〜

忠秋



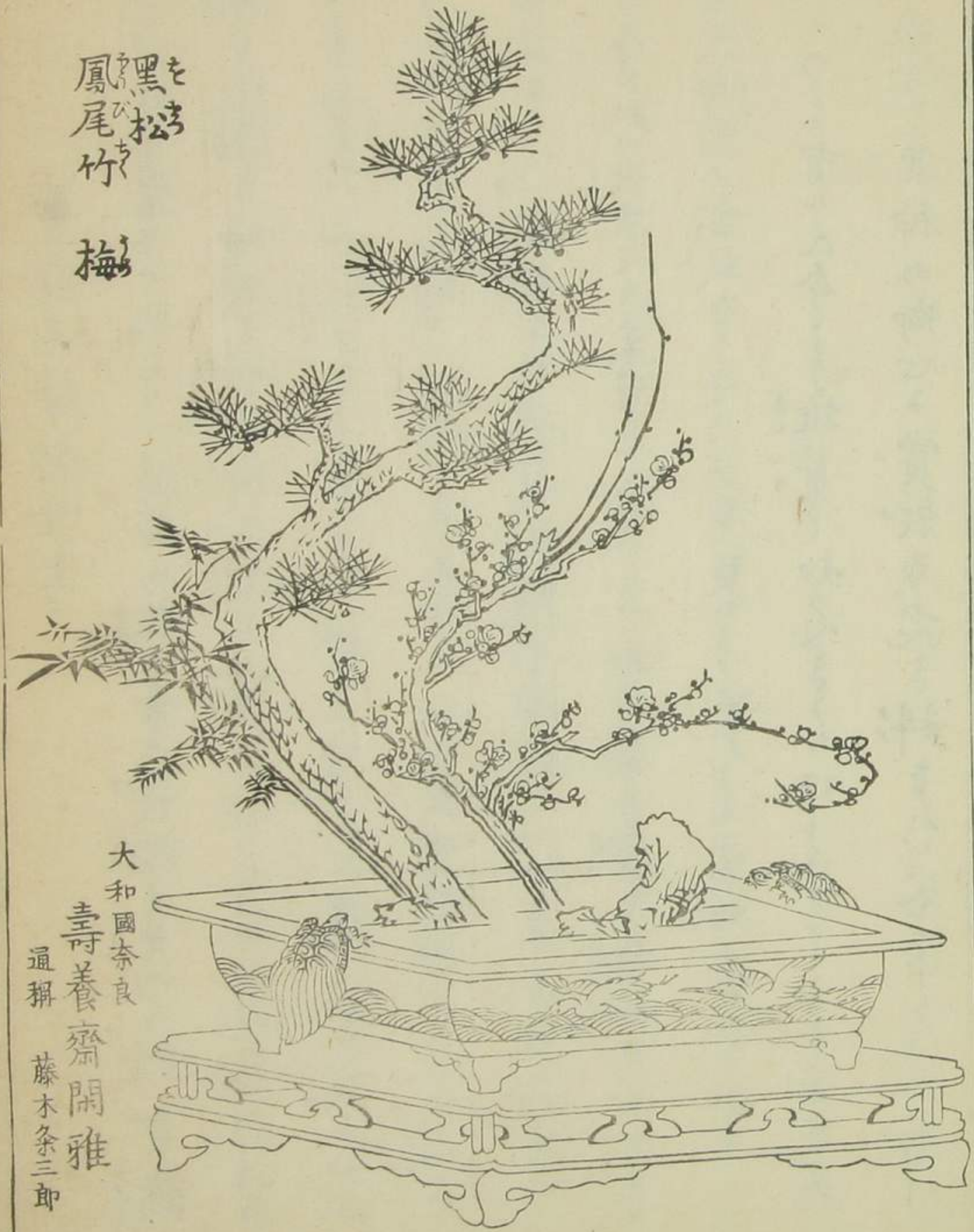
丹後國岩瀧  
 翠松齋林南  
 通稱 千賀五三郎

香山画



鳳尾松

梅

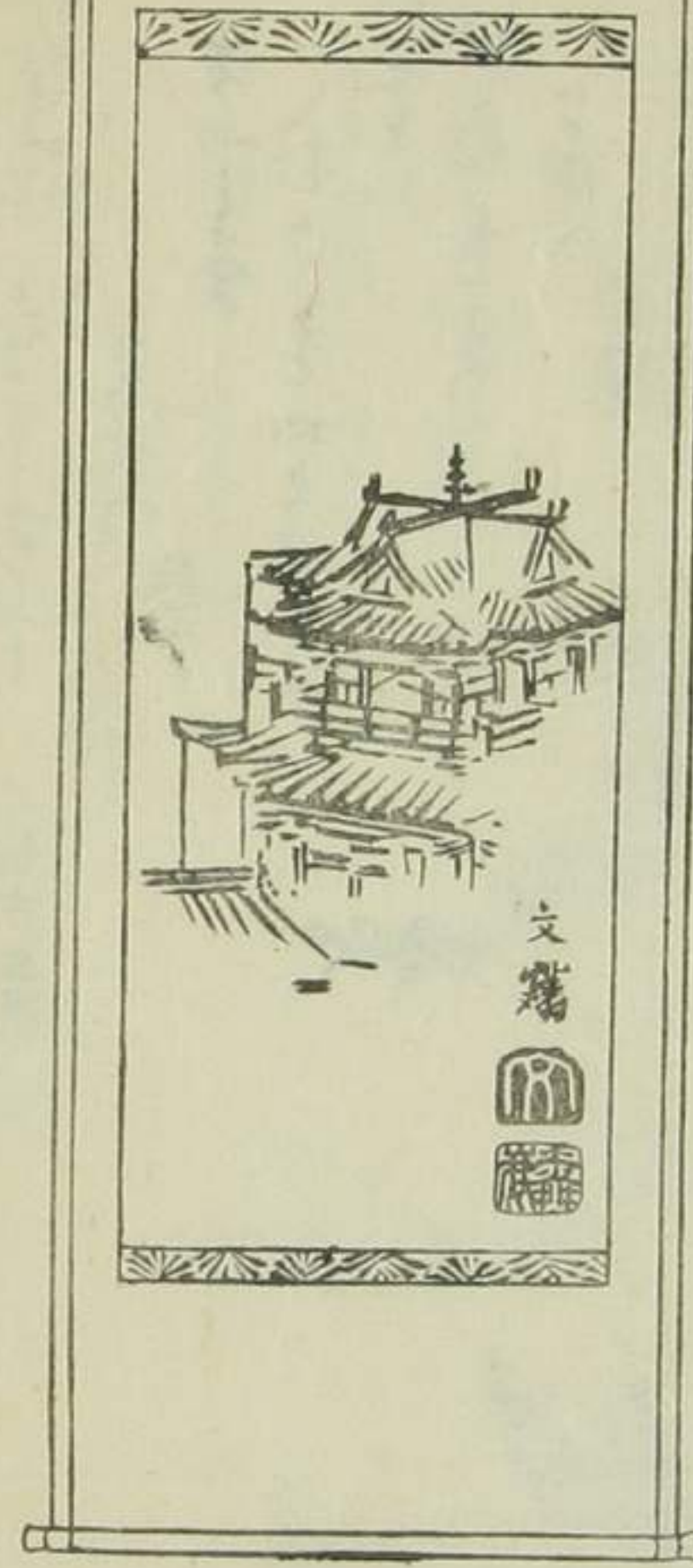


大和國奈良

壽養齋開雅

通稱

藤木条三郎



三友驕 肩勢不孤更看  
 龜鶴上 銅盃雲煙恰挂飛  
 樓影併 正蓬萊仙閣圖

五齋賴綱

皇國活華赫隆考

今皇國之盛りと行そく活華の伎乃世發起を多るる起元を熟  
 考ふ遠く神代伊邪那美命の靈を祭るに花を用齋祭る  
 古典の上昭々少くそる齋を祭るに處を花窟といふ  
 増基法師が紀行より見え今も紀伊國熊野郷に其名存る  
 聞へく三枝祭りと以三枝花飾酒樽祭るに事令地御典り  
 天皇の太古より木草の花をとりて神を祭り靈を鎮和せ奉る夏  
 皇大御國の古式なるをいふを更なりされども當時其花を奉る  
 状といふ有らん今より推量を知るべきものありて本末其花  
 子奉る其神の御心は賞殿を以て料をば茶の中へ美華

を選ぜり美華を以て花の中にも其枝葉の格好を風姿  
 可愛き様採成して獻するに違ひ有る如斯花を  
 選風姿採成しては則活華の伎乃起りて濫觴に有る  
 皇國ハ萬事おろろそりて細少なる伎乃委曲  
 傳へて國風を古書に於て瓶に花をさし事のみ見え  
 て規則を正せて状杯ハ漏る傳へざるを吾園の御家より古より  
 後花園天皇の御宇に於てそるやんそるよ由名  
 中納言基秀卿は白七がなほも嚴重に花則を定免  
 玉ひそらん有るそを尋常の説ふ此頃彼相阿弥が輩本非れ  
 茶法を轉して今の茶道を開き初つるを其茶道より人々を常

いけ花を用ふより茶道に牽引れ義政公の物好に化せしむ  
 此時より権輿つりの如くいひたりし事つらきもあれ既に北畠  
 玄惠法印が喫茶往来卓懸金欄置胡銅之花磁机敷錦繡立  
 罽石之香匙火箸蟬娟兮甌外之花飛疑於吳山千葉之粧芬郁  
 兮爐中之香誤於海岸三銖之煙と云えられ如く古より花字  
 瓶をさしを翫ひつる事といひても更し彼義政公の時にも書院の  
 御節に插花を用ひし事羣臺觀左右御飾記に云えられ  
 如くあれが當時よりいひしこと花菴荅臺杯の設の有つる事著明  
 知れり然るを此伎の監觴を諸家諸流に傳へし趣画々として  
 或ハ印土の釋迦文佛が拈華微笑起るといひ或ハ阿羅漢阿難の事

發るといひし事赤縣の表仲郎が瓶史張謙徳が瓶花譜陳湜子が  
 花鏡なる瓶花の事字記せざるを是と権輿より論へれ  
 如く其流其流より尚さぬともいひし事如く如く説れ  
 一定さるるも皆其流祖の已れりいひし事推量り定めしむ  
 説かれざるべしともいひし事如此印土赤縣も花の推量事どもハ  
 あれど唯佛の供具とておのき一己の愛翫の爲の事と皇國  
 への高貴尊重なりとも云ふ更なり士庶の上り流りとも時り  
 あれ節に當りて常に此伎を用ひて活花を愛翫する事ハセと  
 成つる元來草木乃花の萬國に勝きて立並ふ美艷さ故なれど  
 彼赤縣印土よりいひし類ふあはれは其草木のなるの殊に

美廉ウレハレ由縁イハレと神代イ五十猛神イサキシノの天上アンと木種コノネを子持下サハに給  
 了ア一一字諸審國ウエ殖給ウエを奉コトて特コト皇國ウエ子殖置給ウエへり  
 其木種ウエより生出スつる樹スども此萬國スに勝スれり喬木スと云スつるを  
 彼景行紀スから筑后國ス乃歷木風土記スから近江國スの栗樹スを始め  
 古事記スより云スる和泉國ス乃大木伊豫國ス乃桂木スなどよく多スく  
 聞スえ殊ス木花ス之佐久夜毘賣命スと云スる御名スを櫻ス大刀ス自神ス  
 と云ス白スと云ス櫻樹スの靈スと云スを今尚華スと云スる此花ス  
 限スるゆへにすべからず花スと此神スこそ知スりしと云スる成生スなる  
 又木スと云ス扶桑スの大樹スの生出スる地スからわら皇國ス乃總稱ス字赤縣ス  
 と云ス扶桑スと唱スへ其華ス乃可愛スを稱ス譽スて東華ス青華スと云ス榮スせ

一一わと云スる扶桑樹ス預スれる事スなると云スる平田翁スが考記スと云スえ  
 せりはきばかく花祖スと云スる神スの生スせる國スと云スる他國スと云スるを  
 華スをりて稱スる皇國スと云スる今活花スの伎スは真盛スと云スる榮スゆら  
 と云スる天スつ神スの御量スと云スる久々ス能智ス野推ス乃神等スの山野ス  
 乃花スを持別スて幸スい給スへる神事スなると云スる思スやうと云スる吾  
 園ス御家ス乃活華ス乃道スと云スるもいスく古スく世スに普スく御家流スと唱スへ  
 来スアスが此伎スの生スる八ス懼ス分ス流スと云スる數々スのたがれと云スる  
 其源ス青山スと云スる號スを冠スらせり呼別スつと云スる  
 天照皇大御神スの高天原ス御座時須佐之男命ス乃種々ス荒惡行事ス  
 をなス給スひと云スる青山スをわら山スと云スる給スへる事スの有スらる

後アヲよりその荒魂アラミタマ神カミに坐マセる五十猛神イヒタケカミの前サキより入りていそごとく木種キノタネを  
多サバく持下モチサゲりて皇國ミヤクニ殖生ウエオホし給へる功積ミイサヲよりいそごとく勝スシて木々の立  
榮サカえ青山アヲヤマのまよまよかへるいそごとく深コトワリき理コトワリよとて

靈元レイゲン天皇の御宇ミコトノサトに 大納言オホノリヤク基香キカウ卿キミと白シラせるが青山アヲヤマ社ヤシラを齋イキ祭マツル  
給へるよりいそごとく唱へまつるなりいそ尚ナカ此コトよりいそごとく字ナリも委マカし  
辨ワキマへいそごとくいそごとく御ミコト憚ハヤカる事コトどもいそごとくいそごとくいそごとくいそごとく  
いそごとく吾ウ汲クム流ミヤガレのいそごとく車クルマを引ヒキていそごとく思オモふ人ヒトもいそごとく有アべられ  
いそごとく漏モラる阿波アヲ礼レ古コもいそごとく例タシマレ掃ハキたる昇ノボ平ヘき御世ミヨに生ナれ合アはれ  
いそごとく風雅フエビ車クルマを常トコに翫モシぶ事コトの歡ウレシ喜ヨロコぶいそごとくいそごとくいそごとく益トク  
今イマ往ユク末スエといそごとく此コノ伎カキの世ヨに榮サカえ行ユクぬ處トコロはいそごとく朝アサ日ヒより艶ニホふ

花櫻ハナウツギのごとく彼漢人カノコトの言立コトタテに木徳キトク仁風ニフウと慕ヒひいそごとく  
其風雅フエビ事コト字ジ仰アツげいそごとくいそごとく珍メ重シげいそごとくめやと  
草クサも木キも苔コケむす巖イハと那ナりぬる榮サカ行ユクぬ花ハナのいそごとく道ミチ

嘉永六年

錦章亭水谷有正

志シるす

跋  
十纂

良家小姐雖五官端正吐屬  
清雅固非天僊化人一見消  
魂褫魄者也夫花亦然其在  
圃畦未經矯揉者雖端正清  
雅如良家小姐奈有些呆氣  
一經矯揉而插瓶盞則態度

絕塵如天仙化人洵足以消魂  
褫魄矣此插花技之所以不可  
已也壽松園主人插花者流  
之巨擘也屬者著活花園說  
其極法變幻位置工麗秀色  
可餐余評之曰滿冊會評多  
天仙化人若有人嫌其戕賊花

亦以為媚態則是避毛嬙驪  
姬之魚鳥麋鹿百亦末  
如之何

嘉永癸丑桂月蒿水學人駒

撰并書



